

曲目紹介

■ショパン・ピアノ協奏曲第1番ホ短調 作品11

「ピアノの詩人」フレデリック・フランソワ・ショパン。ポーランドに生まれ、現在ポーランド国民が敬愛する偉人の一人として多くの人から愛されている。生涯通して肺結核に悩まされ、わずか40年ほどでこの世を去ってしまった彼だが、その短い人生の中でたくさんの素晴らしい作品を残した。

彼の作品には、「別れの曲」「小犬のワルツ」「英雄ポロネーズ」「葬送行進曲」などの有名な曲があるが、ショパン自身がコンサートで自作の曲を演奏することはめったになかった。（ちなみに、ショパンはバッハの作品を弾くのが好きだった。）また、大きなコンサートホールで演奏することもあまりなく、サロンで少しピアノを演奏する程度であった。しかし、ピアノの指導は大変熱心に行っていて、「作曲家」としてだけでなく、「指導者」としても名声を得ていた。

今回演奏する「ピアノ協奏曲第1番ホ短調作品11」は、ショパンが20歳のときに作曲し、ショパン自身のピアノによって初演された。ショパンのピアノ協奏曲は2つあるが、今回演奏する第1番の方が第2番よりあとに作曲された。（第2番は19歳のときの作品。）2作目の協奏曲であるだけに、第2番よりも内容が充実していると言われている。ショパン円熟期の深さはあまり見られないが、青年ショパンの明るく新鮮な作品である。

第1楽章 Allegro maestoso （アレグロ マエストーソ）3/4拍子 協奏風ソナタ形式。

出だしは重厚かつ壮大なオーケストラによって演奏される。オーケストラの序奏のあと、ピアノが堂々と登場する。提示部はどこか悲しくて哀愁たどよう第一主題と透明で優しい第二主題、また第二主題の後半は軽やかな音を楽しむことができる。オーケストラの間奏を挟んで展開部へ。前半は美しい旋律、そして後半はピアノとオーケストラが共に曲をどんどん進めていく。再びオーケストラの間奏を挟んで再現部へ。提示部と同じように曲を進めていくが、フィナーレは激情的。最後はオーケストラによって演奏を終える。

第2楽章 Romance. Largehtto （ロマンス、ラルゲット）4/4拍子 自由な三部形式。

「ここで僕が求めたのは強烈な効果ではなく、静かで憂鬱なロマンティックなもの、幾多の幸福な追憶を喚起するような、一点を見つめるような印象、春の美しい月光を浴びた瞑想のようなものだ。」これは、ショパン自身が友人宛の手紙でこの楽章について述べたものである。このショパンの言葉通り、静かなオーケストラの伴奏にのって、ピアノが美しくメロディーを奏でる。中間部は激情的だが、すぐ穏やかなメロディーに戻る。ノクターンを思わせる楽章である。

第3楽章 Rondo. Vivace （ロンド、ヴィヴァーチェ）2/4拍子 ロンド形式。

第2楽章とほとんど切れ目なく始まるこの楽章は、ショパンの祖国ポーランドの民族舞踊スタイルの一つである「クラコヴィアク」のリズムで進められていく。「クラコヴィアク」は、2拍子の快活な踊りである。しかし、快活さと共に気品も持っている。オーケストラの美しい和音と左手の明るいリズムにのって、右手が華麗なパッセージで発展を繰り返していき。またオーケストラのみの間奏では、ダイナミックな面も楽しむことができる。曲の最後は堂々とした終わり方で、この協奏曲を華やかに終える。

秋元 孝介 (PIANO)

曲目紹介

■マーラー・交響曲第1番ニ長調「巨人」

1889年11月20日水曜日。グスタフ・マーラー(Gustav Mahler, 1860-1911)は、ハンガリーの首都ブダペストにおいて、ブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団を自ら指揮し、「2部から成る交響詩」を演奏しました。ところがこれが大失敗。聴衆はこの曲の新しい形式に何一つ理解を示そうとせず、居心地の悪い気分になりました。後にマーラー自身が、「一公演後、友人たちは気兼ねして僕を避けた。誰も演奏や作品について僕に話そうとせず、僕は病人か仲間はずれになった人間のように、一人で歩き回るしかなかった」と語っているほどです。ショックを受けた彼は、この曲の楽譜を3年にわたって机の引き出しの中に入れて鍵をかけてしまいこんでしまいました。—しかしこれこそが、現在マーラーの交響曲の中でも最も多く演奏される、「交響曲第1番」の記念すべき初演だったのです。

この曲が再び日の目を見ることになったのは、1893年。マーラーは、市立劇場の首席指揮者として働いていたハンブルクで加筆修正作業を行いました。ブダペスト初演時の自筆稿は見つかっていないので比較することはできませんが、この修正はかなり大胆で大規模なものだったと言われています。そして1893年10月27日、交響曲第1番はハンブルクで再演され、成功を収めました。

このときのプログラムには、詳細な標題が掲げられました。

「巨人」交響曲形式の音詩

第1部：青春の日々より—若さ、結実、苦悩のことなど

I. 春、そして終わることなく（序奏とアレグロ・コモード）

II. ブルーミネ（アンダンテ）

III. 帆をいっぱい張って（スケルツォ）

第2部：人間喜劇

IV. 座礁して！（カロ風の葬送行進曲）

V. 地獄から天国へ！（アレグロ・フリオーソ）

「巨人」のタイトルは、ドイツの作家、ジャン・パウル(Jean Paul, 1763-1825)の長編小説「巨人」(1803)によるものだと言われています。「巨人」は、天才的で奔放な王子アルバーノが、波瀾万丈の運命にもてあそばれた末、めでたく王座につくというストーリーですが、ワイマールの宮廷文化の批判、天才主義や巨人主義に反対する思想も織り込まれています。今ではドイツ人にもほとんど読まれることのない、非常に難解な小説ですが、マーラーがジャン・パウルを熱愛していたこと、そして当時の聴衆がこの作品に親しんでおり、曲の理解に役立つであろうという理由から、標題として採用されました。

しかし、「巨人」のタイトルは、各楽章の標題とともに、1896年3月16日のベルリンでの演奏の際に全て削除されてしまいました。「これらの標題は不十分で、曲に的外れな性格付けがなされてしまい、聴衆を間違えた道に引き込んでしまう」とマーラーは考えたのでした。また、第2楽章「ブルーミネ」も同時に削除されました。この楽章が削除された理由には、「4楽章構成の典型的な交響曲の形式を遵守しなかった」、「この楽章の雰囲気こそぐわなかった」など諸説ありますが、「他の楽章ほどの完成度に達していなかった」とマーラー自身が考えたのでしょう。なお、この削除された楽章は紛失されたと思われていましたが、第2次世界大戦後に発見され、現在では「花の章」として独立して演奏されたり、第2楽章として挿入されたりしています。（というわけで、「交響曲第1番」に「巨人」の標題をつけるのは、後の出版社やレコード会社による戦略に過ぎないのですが、すっかり慣例となってしまったので、今回の演奏会でも使用しています）

→次ページに続く